

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）  
分担研究報告書

高齢がん患者の薬理学に関する研究

研究分担者 今村 知世 昭和大学先端がん治療研究所 准教授

研究要旨

「第8章 高齢者の臨床薬理」の執筆および査読を担当した高齢者がん医療 Q&A・総論が発刊された。「プレフレイル高齢大腸がん患者のための臨床的提言」の作成に向けた準備を行った。

A. 研究目的

加齢による様々な生理機能の低下に伴い高齢者では薬物動態 (Pharmacokinetics:PK)や薬物感受性 (Pharmacodynamics:PD)が非高齢者とは異なることが知られている。そこで、高齢者におけるがん薬物療法の有効性と安全性の担保に向けて、臨床薬理学に基づいた検討を行う。

B. 研究方法

モデル事業として実施される「プレフレイル高齢大腸がん患者のための臨床的提言」作成における内科治療ワーキンググループ(WG)メンバーとして、大腸がん治療に用いられる抗がん薬および支持療法薬について高齢者での PK や PD に関する情報を収集した。

C. 研究結果

大腸がん治療のキードラッグである 5-FU 点滴静注およびカペシタビンについて、プレフレイル高齢大腸がん患者への投与に対するクリニカルクエスト(CQ)を提案した。またイリノテカン投与前の UGT1A1 遺伝子検査は、事前の高リスク患者把握として保険診療下で実施できるものの臨床ではあまり実践されていない。したがって、骨髄抑制の副作用が発現し易くかつ重症化し易いプレフレイル高齢者では「UGT1A1 検査が推奨されるか」といった CQ も提案した。

D. 考察

「プレフレイル高齢大腸がん患者のための臨床的提言」の作成にあたり、高齢者における臨床薬理に基づいて CQ や提言が議論・検討されることは重要である。

E. 結論

高齢がん患者での薬物療法において、安全性のみならず有効性の担保を目指すにあたり、臨床薬理的な検討は必須といえる。